

刻、終戦の伝達と共に、中国人に対する言動、行動に注意するように訓示あり。もはや何を考え、何をする事もなく、呆然自失の状態となる。二、三日後に広東の中山に移動し、武装解除となり、とうとう軍人の魂を、手放す運命となった。

その後は、河南地区へ移動抑留され、十月より二十一年四月まで、七か月間、捕虜と云う日本人には恥ずべき言葉の下に置かれ、何もかも忘れて、人間の改造に会ったようです。

やがて待望の帰国の日がやって来た。五月初めに、行動を開始し、乗船帰国となる。船の中の人間模様、対人関係等、あさましき部分や、面白い部分等、様々なものを見聞きました。

浦賀の港に着いて、やっと帰って来たと思ふのものでしたが、その後が悪い。検疫の結果、コレラ患者が発生し、船留めとなり、二十日くらい遅れて上陸した。この時、一人の兵隊が、海岸に向かって飛び込んだ事件があった。と聞いて、誰しもさもあらんと思ひながらも、まともに上陸して手続きを終えて帰路に着きました。

博多駅で、福岡市の一望の焼け跡を見た時、ほんとうに戦争とは何であったのか、を感じたものです。博多駅より二時間くらいで、我が家に帰り着く。母の第一声、「おお生きていたか、良く帰って来た」の言葉であった。満四年の勤務中、後半は手紙も着かず、便りもない状態であった、との事でした。

純兵団の後日談、帰還した英霊は、六百一人であったとの事でした。心から冥福を祈ります。兵団標語は「焼くな犯すな穢すな」で、対民衆軍紀は酷しいものであり、それを実行していました。復員後二年間程、マラリア熱が出て、妻を困らせた事もありました。

仏印の明号作戦

石川 岩 木 栄 光

私は現役で昭和十八年四月、金沢の連隊に入営し、約二か月後の六月出帆、仏印のサイゴンに上陸しました。そこから四〜五日かかってフーランチョンにつき、第一

大隊第二中隊に配属されて、第一線のランソンで勤務しました。

私の部隊は第二十一師団第八十三連隊第一大隊第二中隊で、部隊は第一線から国境を越えて中国を北上しました。第二中隊は竜州からさらにサンチンへ行った。第二中隊だけが最前線にいたので師団通信一個分隊が配属されてきました。そのため印度の通信が入ってきて、だんだん日本軍が負けていることをうすうす知り、ひそかに前途に不安を感じたことは事実であります。

中国大陸を補給もなく縦断して、仏印国境を通過した光部隊（第三十七師団冬兵団の作戦中の防諜名）は、乞食同然の格好で、兵隊半分・苦力半分でした。補給も何もなく、中支・南支と戦いながら行軍してきたのですから当然だったでしょう。私たちは、光部隊の連中の話を聞いたが、随分長い間苦勞してやっと暖かい仏印について安心したようでした。けれど、続いて南下して泰国境に向かうのだと思うと、同じ日本軍人として、心の底から大変だなあと、つくづく思いました。

明号作戦は、昭和二十年三月九日から五月十五日まで、

フランス軍の武装を解除した作戦です。

湘桂作戦で中国から二個師団が入ったのは二十年の初め、その後にフランス軍の武装解除が始まったのですが、部隊は皆それぞれ攻撃、占領の部署を決められ、三月の幾日でしたか一挙に行動を起こしました。

仏領印度支那（ベトナム）の広さは、今の日本領土から九州、沖縄を除いたぐらいの面積だったので、一個師団や二個師団で占領するのは大変でした。

我々の第二中隊はシエンカンにいて、中隊命令で、パッと一ぺんに阿片局を攻撃したのですが、ほとんど無血占領することができました。そこには保安隊があつて、大部分は安南人だった。門を開けると言ったら、彼らは傭兵だからあまり抵抗なく開門しました。

阿片局も占領したが、阿片は大変値打ちがあるけれども、その時は阿片がどういふものか分からなかったのです。

第一次作戦で我々は北方をやったが、第二次では部隊は南へ下った。北は南へ、南の方が北へ、仏軍は橋を全部落として逃げたので、松山した木を切って橋を架け掃

討戦を行いました。

金田中隊長等の戦死

第一次作戦で仏軍を武装解除した時、傭兵の安南人をそのまま「兵補」として兵の補助として班を作りました。班長も置いて、一緒に生活をし、飯上げ（食事の配給）も一緒だった。前に話しましたように、フランス人が逃げたので、その後架橋したり、掃討などに協力してくれたのです。

掃討作戦のある時、阿南人運転のトラック二台で出発した。はじめはゲリラを警戒し機銃等を装備していたが、四〜五日何もないので安心していただけなかった。やはり情報が漏れていたのでしょう。

ゲリラが待ち伏せしていた。バリバリと一斉射撃です。第一台目の助手席の中隊長が狙撃され、外へ飛び出した者は手榴弾でやられた。中隊長以下五人戦死、安南人の運転手も死にました。私は二台目に乗っていたが、先に跳んで出た戦友は死んだ。私は続いて跳び降り攻撃し、敵は退却したが、隊長たちを失って残念でならなかった。仏印の現地人は植民地で仏人にいたためつけられていた

ので、日本人がやった方が良いといていたし、日本人に対する信頼は厚かったと思います。

日本が北部仏印に進駐する前は海賊などが出てきて略奪されたりしていたが、日本軍が来てから海賊は来なくなつたという。

仏印は広大な土地で、一個師団（二十一師団）の小兵力で治めることは大変です。日本軍の軍紀は厳しかったし、宣撫工作も徹底していた。不心得者が市場などから品物をただで持つてくるなどすれば軍法会議にかけられたりしました。

明号作戦後も、現地安南軍人は協力的で、陣地構築も一緒、起居もともにしたり、心の通じるものがあつたのです。終戦時、兵補となっていた安南人に「日本は戦争負けたのだから」と銃も装備も全部やったので、彼らは早速ホーチミンの旗を立てた。戦後、仏印（ベトナム）の悲劇は、北は中国、南は連合軍と、住民の意思は無視されて、南北二分されたことです。

私たちの師団はずっと北にいたので、戦後中国軍が進駐してきました。治安維持のため銃も中隊に十数挺置い

て、中国軍と交代で警備につきましたが、服装もキチツとしていましたし、日本人に敬意を表していました。

私たちの中隊も、一部はビルマへ行くなどして帰ってきたのは七〇人ぐらいで、多くの戦友が戦没しました。

昭和二十一年四月、浦賀についたがコレラ船で、一、二か月留め置かれた者もいた。

私の軍隊生活の苦労の実態

鳥取県 小 椋 武 光

私は大東亜戦争の真最中の昭和十八年一月に鳥取第四十七部隊に歩兵第二百一連隊として入隊、三か月後仮検閲を受けた。三月には満州に行くことが分かっていた。

父母や妻は何回か日曜日に、不自由な砂糖で私の好きな餡餅などを持って面会に来てくれた。ある日面会所にいると、上官が巡察に来た時、私が敬礼動作を機敏にやると、父母たちは早くも兵隊らしくなったことに驚いていた。

三月二十四日、渡満することとなり、鳥取駅で見送りに来た父母、妻、親戚の人に最後の別れをして、多くの人々の歓呼の声に送られて乗車、夜には下関港を出航、日本海の荒波に初めて海を渡る船酔いに苦しんだ。

夜中に釜山港に上陸、輸送列車で北進、三月二十八日鮮満国境の黄緑江を渡って満州国に入り、三月三十日三江西省鶴立県興山歩兵第二百一連隊に編入された。

七月十日、第一期の検閲が済み、陸軍一等兵に進級し心を新たにした。

その間、血の出るような訓練とソ満国境警備であるが、苦労したのは厳しい毎日の訓練でした。特に起床、洗面、点呼で人より早く並ぶことと軍馬の管理でした。我が中隊は機関銃中隊で軍馬も飼育しており、朝の点呼が済むとすぐ厩に早がけ、決められている自分の馬の寝わらを外に出して糞を捨て、大切な馬の脚をよく洗って保革油を塗って飼付けをやることである。

飼付けが終わって兵舎に帰ると週番上等兵が炊事場に飯上げに行く。早く帰った者から飯上げに行つて各班に分けたのを持ち帰る。配膳ご飯は大豆入りや高りゃん入